

KIWC技術委員会の活動

KIWCでは、湿地の保全と賢明な利用をより効果的に進めていくために、3ヵ年ごとに定めるテーマについて、専門家による技術委員会を組織し、調査・研究活動を行っています。3年間の研究活動は報告書にまとめられ、釧路地域の湿地保全と賢明な利用に関する事例資料として、関係機関等で広く活用されています。

2004-2006年度技術委員会報告書の発行

2006年度は、2004年度に始まったKIWC技術委員会活動「湿地の保全と賢明な利用のための広報・教育・普及啓発に関する調査・研究」の最終年度となりました。

3年間の活動のまとめとして、ラムサール条約の求める「CEPA : Communication(コミュニケーション)、Education(教育)、Public Awareness(普及啓発)」に着目し、地域の人々の湿地に対する理解を深め、その保全に対する意識を高めるための手法について、各委員が自ら実践している取り組みを紹介し、過去2年間におこなった事例研究をもとに提言をまとめました。これらの報告をおさめた「2004-2006年度活動報告書」は、2007年春に関係機関等に向けて配布される予定です。

KIWC技術委員・専門家の韓国派遣

2005年11月に開催された第9回ラムサール条約締約国会議において、次回の締約国会議は2008年に韓国で開かれることが決定しました。開催都市となる慶尚南道・昌原(チャンウォン)市では、さっそく自治体や報道の関係者らが、第5回締約国会議開催都市の釧路を訪れ、会議会場を視察するなど、開催準備のための情報収集活動が始まりました。

2006年12月にはKIWCより技術委員・専門家ら3名が昌原市に招かれ、市の主催による講演会での発表や、市内の湿地の視察をとおして、湿地保全活動における地域住民参加の重要性を、地元の関係者や市民に伝えました。

～韓国・昌原市を訪れる～

KIWC技術委員 若山公一（釧路湿原温根内ビズターセンター指導員）

札幌で前泊して翌12月26日の午後、まだ秋模様の感がする韓国金海空港に降り立った。ここから目的地の昌原市まで一時間足らずである。迎えにこられた市の職員から手渡されたスケジュール表には、講演を挟んで、注南(ズナム)貯水池の他数箇所の視察が予定されていた。昌原市の環境担当職員と懇談する機会も多く設けられ、ラムサール会議の開催地の先輩から様々なことを吸収したいとの意欲が随所に感じられた。

講演は野鳥のパネルが並べられた市民ホールで行われ、KIWCの新庄久志氏からラムサール条約の理念や釧路での会議の様子、釧路湿原の保護などを、私からは温根内の自然環境やボランティア活動などを紹介した。

午後からは、市の最北部を流れる洛東江の浸透過水を利用した最新の浄水場を見学、そして今回一番楽しみだった注南貯水池へと向かった。注南貯水池はガシカモ類を中心とした20種あまり数万羽の渡り鳥の中継・越冬地として知られており、2008年の会議での登録を予定している。野鳥の生態学習館と監視タワー、観察路が設置され、学校対象の観察会も行っているとのこと、通常専門員だけが使う監視タワーに登らせてもらい貯水池を一望、ヨシの陰で風除けしているヘラサギや波間に浮かぶカモ類などを観察でき、多くの野鳥にとって重要な湿地であることが十分感覚できた。

夏には池一面がハスに覆われると聞く。渡り鳥の季節以外にも近くの白月山や馬金温泉などを結ぶ散策コースを楽しめるなど観光面での魅力ももつていて。この貯水池に自然観察や観光に利用できる木道を設置する計画を検討しているとの話もあって、温根内木道がヒントになったのか、具体的なアドバイスを何度も求められた。確かにハスの上を歩くような木道は想像ただけでも魅力的である。しかし、野鳥の生息に支障が生じる人工物の設置は極力避けるのが賢明、設けるにしても渡りの時期には撤去できる浮橋のような構造か、渡り鳥の利用水域を避ける等、十分な検討を重ねていただきたい、そのような回答をした憶えがあるが、再訪した際に確認したいことの一つである。

最後の夜。ラムサール会議会議場となるコンベンションセンター見学の帰路、市庁舎前に飾られたクリスマスツリーと光のトンネルを皆でくぐり抜けた短い散歩とともに印象深い昌原市での日程を終えた。

訪韓したのは今回で二度目だが、共通して驚いたのは都市部のカササギと人のパワー、共通して喜びは人との交流、来年10月三度目も同じような感想を味わいたい。自然環境だけでなく、日本文化とのつながりの深い歴史・文化遺産や、パンソリ・サムルノリなどの民族芸能を訪ねる楽しみもある。

最後に朴完洙市長をはじめ、崔洛善福祉環境局長、環境政策課職員の皆様、技術スタッフの皆様、通訳の姜珠利さんに深く感謝申し上げる。



写真提供: プサンニュース



注南貯水池を望む



注南貯水池生態学習館

姉妹湿地訪問団を歓迎

2006年4月21日に、姉妹湿地を抱えるオーストラリアポートスティーブンス郡の姉妹都市委員会訪問団11名を歓迎し、釧路市との共催による歓迎セレブションを地元のホテルにて開催しました。釧路地域の国際交流団体や訪問団のホームステイ先のご家庭のほか、2005年に姉妹湿地のハンターウェットランズセンター*で開催された「渡り鳥がニューカッスルに帰ってくることを記念する国際展示会」に、釧路より作品を出品した子供達など、約80名が出席しました。

会場には2006年3月に開催された「国際ツール作品展」出品作品や、オーストラリアの市民ボランティアの手によるキルトなどが飾られ、出席者の目を楽しませました。

また、スライドショーによる湿地紹介や、郷土芸能の披露など、釧路地域の自然と文化を紹介するアトラクションなども行われました。

会場は終始なごやかな雰囲気で、両国の参加者が談笑する姿があちこちで見られました。

*2005年にウェットランドセンター・オーストラリアからハンターウェットランズセンター・オーストラリアに名称が変わりました。



2006.4.21

国連訓練調査研究所(UNITAR)研修ワークショップの共催

2006年8月27日から31日にかけて、UNITAR(国連訓練調査研究所)アジア太平洋地域広島事務所による研修ワークショップが、KIWCとの共催で実施されました。UNITARによる釧路での研修ワークショップとしては6回目の、UNITAR広島事務所の主催としては2回目の開催となります。

今回のワークショップでは「生態系・水と生物多様性」がテーマに定められました。水環境に着目した生態系と生物多様性の保全に関する知識や技術を習得するため、アジア・太平洋地域の開発途上国を中心に、27カ国44名の行政官や専門家が参加しました。

メイン会場となった釧路市観光国際交流センターでの講義や実習のほか、釧路湿原と阿寒湖を視察する1泊2日のフィールドツアーにて、ラムサール条約登録湿地の管理運営や利用の方法、地域住民とのかかわりなどの事例紹介も実施されました。参加者にはワークショップとその後のフォローアップにより得た知見を、自國でさらに普及・発展させる指導者となることが期待されています。

研修の合間には、地域文化団体等の協力により、釧路蝦夷太鼓と華道実演が披露され、海外からの参加者に大変な好評を博しました。



JICA2006年度湿地保全研修コースの実施

2006年5月22日から7月4日まで、JICA(国際協力機構)集団研修「湿地における生態系・生物多様性とその修復・再生及び賢明な利用」研修が、JICA帯広国際センターを研修実施機関、環境省自然環境局及びKIWCを受け入れ機関として実施されました。

集団研修として3回目の今年度は、6カ国(ドミニカ共和国、インドネシア、モンゴル、ソロモン、ベトナム、ザンビア)より環境保全や自然保護に係わる中堅行政官や専門家6名が参加しました。北海道の釧路湿原で始まった自然再生事業から、本州首都圏の干潟再生、沖縄のマングローブ湿地保全のための取り組みまで、日本列島を縦断しながら、多種多様な環境における湿地の保全・自然再生の事例について学びました。また、研修員は環境教育プログラムやエコツアなど、湿地の自然資源の持続的な利用方法に関するさまざまな実習にも参加しました。

研修員達は滞在中、ホームビギットや、エコツアーや環境保全について学んでいる大学生との討論などを通じて、さまざまな市民と交流しました。



JICAメキシコ・ユカタン半島沿岸湿地保全計画カウンターパート研修

2006年6月27日から7月28日にかけて、メキシコ・ユカタン州・セレストン生物圏保護区の専門家2名が、エコツアーリズムや漁村を中心とした自然環境の持続的利用について学ぶため来日しました。この研修はJICAが2003年よりこの地で推進中の、湿地・生態系保全プロジェクトの一環として実施されたものです。KIWCからも2005年に湿地保全の専門家を派遣し、湿地保全のための「モニタリング手法」等の指導を行いました。

KIWCでは日本各地を周る日程のうち、北海道を会場とする7月16日から25日の研修を受託しました。釧路湿原や霧多布湿原で実施されているエコツアープログラムや、地元の漁師さんの指導による「番屋での魚料理体験」などの体験実習をつうじて、特に地元産業と結びつきの深いエコツアーレストランの事例を紹介しました。



March 2007